グローカル通信

Ryukoku University GLOCAL TSUSHIN 2023.3 vol.61

うるおいとにぎわいのまち東近江市	1
市民社会の声と経験を集め、平和で公正な社会の実現を	1
修士論文を書き終えて	2
2022年度 修士論文・課題研究 題目一覧	2
教員からのメッセージ	3
院生の声届けますー 2022年度を振り返ってー	4
事務局インフォメーション	4

少しずつ暖かくなり春らしさが感じられる頃となりましたが、みなさまいかがお過ごしでしょうか？

さて、今回のグローカル通信61号では、修士論文を書き終えた院生の感想、今年度で龍谷大学を退職される先生からのメッセージ、各種講演会の感想などを掲載しています。

本号が地域公共人材総合研究プログラムを修了される皆様、また4月よりご入学される皆様にとって、本プログラムの多種多彩な取り組み、そして多方面で研究に邁進する院生の様子を知っていただくきっかけとなりましたら幸いです。

慌ただしい時期ではございますが、心身共に健康で新年度をお迎えください。

うるおいとにぎわいのまち東近江市

小椋　正清
（東近江市長）

東近江市は、日本のほぼ中央部、近畿圏と中京圏の中間に位置しており、東は鈴鹿山脈、西は琵琶湖に面し、山地からなだらかな丘陵地が広がり、森・里・川・湖といった多様な姿を見せる自然豊かなまちです。

古くは万葉集に詠われるなど、古代から現代に綿々と続く歴史や文化・伝統が大切に育まれています。

また、道路交通の利便性や大都市圏に近接する条件を生かし、名神高速道路、新幹線が開通した高度経済成長期からは、電気機器、IT関連など多くの企業や事業所が集積する内陸工業地帯として発展してきました。

2度の市町合併を経て誕生した本市は18年目を迎え、日々着実に歩みを進めています。一方で、2005年（平成17年）の国勢調査で116,797人とピークであった人口は、2020年（令和2年）には112,819人と減少しており、人口減少や少子高齢化の問題は本市において喫緊の課題です。新型コロナウイルス感染症の影響により社会が大きく変化した中ではありますが、次代を担う子どもや若者が「住んでよかった」、「住み続けたい」と思えるまちをつくることが、今を生きる我々に与えられた使命であると考えています。

こうした中、人やモノの交流を活発にし、市民の暮らしの質の向上や地域経済を活性化させるためには、希望にあふれ、未来を創造できる若い世代の力や知の拠点としての大学の力が必要です。

貴学とは、令和元年8月に「東近江市と龍谷大学との連携協力に関する協定」を締結し、地域社会が求める高度な職見を有する人材の育成に向けて、ともに歩みを進めています。インターンシップ実習生の受入では、毎年実際に本市の業務を経験し、学生のキャリア形成はもちろん、本市に新しい風を吹き込んでいただいています。

本市では、未来を創造する人が育ち、行き交うまちづくりを目指して「住み、働き、学び、憩う」場の創設を進め、本市の将来像である「うるおいとにぎわいのまち東近江市」の実現を目指し、様々な施策に取り組んでいます。

今後も、貴学が持つ知的資源や人的資源と連携を取りながら、豊かなまちとそれを支える人材の育成に向けて、共創をしていきたいと考えています。

市民社会の声と経験を集め、平和で公正な社会の実現を

三輪　敦子
（特定非営利活動法人関西NGO協議会代表理事）

関西の国際協力NGOによる市民活動は、ベトナム戦争終結前後にボートピープルとして日本に逃れた難民の方々の受入や支援が契機となり活性化しました。そして関西のNGOの連携を深め、平和の実現に寄与することを目的に、1987年に設立されたネットワークNGOが関西NGO協議会です。

設立より現在に至るまで、国際協力政策や実施方法に関する政府や関係機関への政策提言、グローバル・サウスと呼ばれる国々との公正な関係づくりに関するイベントや講演、若い世代の育成を念頭においた地域に密着した多様な形での普及啓発、加盟団体や国際協力NGOへの相談・助成・研修の支援など多岐にわたる活動を行なってきました。特に、ワン・ワールド・フェスティバル for Youthは9年にわたる開催で延べ33,000人以上の高校生が来場したユース世代向けのイベントに成長し、国際協力を担う人材育成の場として地域に定着しています。2022年にはその功績が認められ、SDGsジャパンスカラシップ岩佐賞教育部門を受賞しました。

近年、世界では、気候危機に起因する大規模な激甚災害の増加、新型コロナウイルス感染症という世界規模の感染症の発生、軍事クーデターあるいは軍事侵攻など、平和という言葉がこれまでになく重い響きを持つ状況が生まれています。そうした社会状況は、各国の経済にも強い影響を及ぼしつつありますが、既に脆弱性を抱え、周縁化されがちであった人への影響は特に深刻です。なかでも、外国籍で女性、あるいは障害者で女性といったように複数のアイデンティティから複合的な影響を受ける人たちは、世界中のあらゆる場所で特に大きな影響を受けています。

こうしたグローバル化した世界における地域の災害・人権・環境・平和といった課題を足下から見つめ、困難に直面する人々に寄り添うことができ、課題解決のための仕組みづくりに具体的に貢献する人材の育成やプラットフォームの創造は龍谷大学地域公共人材総合研究プログラムが果たすことができる重要な役割だと当会は考えています。貴学とのパートナーシップがさらに深まることで、グローカルな課題に取り組む人材を育み、次世代とともに平和で公正で持続可能な未来を創造していきたいと願っています。

修士論文を書き終えて

北村　達也
（法学研究科修士課程1年）

今、思い返してみると、自分1人の努力や頑張りだけで論文は「できなかったよなあ」ということが社会人修士としての正直な感想です。職場の協力や龍谷大で共に励まし合いながら学ぶクラスの仲間、指導くださった先生、そして何より家族の協力が無ければ、ここまで頑張れなかったと思います。

僕の場合、論文は、おおかた金曜の夜から日曜日夕方頃までを使って作成しました。約50頁4万4千文字の文章の構成や脚注、誤字脱字の確認は、さすがの僕も何度かくじけました。自分では「よし、これで行ける」と思って1週間後、もう一度見直すと文脈がおかしかったり、言葉の使い方が変だったり。論文に夢中で必死だった時の自分に伝えたい「1人で必死にならないで」と、ちょっと周りを見渡すと龍谷大の仲間であったり、家族であったり、そして何より先生方もそばにいてくれている「ちょっと話を聞いてもらうだけで、心が軽くなっていくよ」と。

佐々木　靖子
（政策学研究科修士課程1年）

瞬く間の一年でしたが、振り返るとすべてが論文の制作につながる学びでした。研究のテーマを論理立てて検証していく工程では、俯瞰的に考察し、主張したいことを明確にするまで葛藤と迷走の繰り返しでした。並行して先行研究や現地調査は計画的に進めなければなりませんが、仕事との両立に苦悩し、何度も諦めようかと考えました。しかし、同志の励ましが大きな力となり、時間のない中で拙い論文ではありますが成し遂げることができました。重畳の時間を過ごせたのも、服部先生はじめご指導いただきました先生方、貴重な気づきを与えてくれた院生、先輩方、陰ながらサポートしてくださった教務課の方々のお陰と心から感謝いたしております。この経験を無駄にしないよう、これからも研鑽を重ねたいと思います。

笠谷　洋佑
（政策学研究科修士課程1年）

今回の修士論文執筆を通し、多くの学びがありました。研究内容についての知見を深めることができたことはもとより、何事も根拠やデータに基づいて思考をする習慣が身についたことが、大きな成長であったと自身では感じています。これは社会人として生活するなかで自然と身につく能力ではなく、学問として学ぶことの有用性を身をもって再認識しました。

他の講義と並行し、実質8か月程度での執筆という大変タイトなスケジュールではありましたが、無事に終えることができました。今回のプログラム受講を踏まえ、社会人のリカレント教育・リスキリングの重要性を微力ですが広めていきたいと思います。

2022年度　修士論文・課題研究　題目一覧

No.	氏　名	研究科	区分	修士論文・課題研究　題目
1	樊　俊哲	政策学研究科	修士論文	水素エネルギー推進政策の現状と課題－北海道の事例を中心に－
2	小松　右詩	政策学研究科	修士論文	外来種問題の倫理的側面－琵琶湖の外来魚問題からの考察－
3	方　佳倩	政策学研究科	修士論文	亀岡市におけるプラスチックごみの削減政策に関する一考察
4	杉山　和則	政策学研究科	修士論文	南海トラフ地震による津波想定地域における地域商業の事前復興政策に関する研究－中心市街地に立地する店舗の動向と代表者意識に着目して－
5	毛藤　洸大	政策学研究科	修士論文	1910年前後の京都市周縁部における民営電気軌道敷設計画と整備過程に関する研究－軌道条例による特許申請路線に着目して－
6	中薗　昭彦	政策学研究科	修士論文	中山間地域における農業水利施設を活用した小水力発電の事業促進政策に関する考察
7	小坂　義	政策学研究科	課題研究	大阪市における各区まちづくりセンターの中間支援組織の機能に関する研究～地域活動協議会の自律に向けて～
8	新里　嘉孝	政策学研究科	修士論文	水都大阪における共生の水辺空間づくりに関する研究～都市部河川における市民の川づくりの事例から～
9	猪飼　隆介	政策学研究科	修士論文	エリアとの一体性を伴う公営住宅建替えの手法と有効性に関する検証と考察－もりねきプロジェクトを事例として－
10	笠谷　洋佑	政策学研究科	修士論文	主権者教育における地方自治体の可能性と課題－18歳選挙権をふまえて－
11	可児　卓馬	政策学研究科	修士論文	遺贈寄付の要因に関する一考察－遺贈寄付者の意識特性の観点からの分析－
12	佐々木　靖子	政策学研究科	修士論文	京都の花街の持続可能性についての課題－花街における事業承継の障壁についての研究－
13	門口　弘樹	政策学研究科	修士論文	パーパス志向による「働きがい」の創出～これからの中小企業に必要な「人材」とは～
14	北川　美里	法学研究科	修士論文	少女が生きづらさを感じない社会をつくるために必要なこと～若年女性の居場所「わかくさリビング」の活動を通して～
15	北村　達也	法学研究科	修士論文	森林経営管理法の現状と課題－奈良県吉野林業地域を素材に－
16	寺本　俊孝	法学研究科	修士論文	DAO(分散型自律組織)の実践的法律論～NFTの発行・運営組織たる日本のDAOを中心にして～

退職にあたって

私は2016年4月に龍谷大学政策学部教授に就任以来、7年間にわたり龍谷大学大学院地域公共人材総合研究プログラム運営委員長を務めさせていただきました。

地域公共人材総合研究プログラムは、研究科横断型大学院修士課程として特徴ある様々なプログラムを有しますが、この場では、特に「地域公共人材総合研究特別演習」について述べてみます。この授業の特徴は、社会人院生と学部卒院生がともに学び、指導教官とは異なる角度から修士論文執筆に向けた準備を進めることができるところにあります。

社会人院生はこれまで自分が仕事や活動で身に付けてきた様々な経験をベースに修士論文を書き上げることになります。多くの場合は期間が1年で、限られた時間の中で自分の経験、知識を理論化し論文にまとめていくことは容易ではありません。この授業では、一緒に学ぶ社会人院生からは自分とは異なる多様な知識、経験に基づく意見を聞けるとともに、お互いの進捗状況を知ることができます。一方、学部卒院生は、2年間かけて修士論文をまとめますが、学部時代の研究蓄積を基礎に新たな研究テーマを設定します。社会人院生の豊富で具体的な経験を聞くことで、先行研究をはじめとする多くの資料から仮説を立て、それを論理的に分析、組み立てていく能力を更に高めることにつながります。このように、バックグラウンドの異なる院生がともに学ぶことから相乗効果が生まれます。

特別演習での報告と自由闊達な意見交換は、実務家教員（元京都市職員）である私にとっても、院生の皆さんから多様な考えを知ることができる楽しい時間でした。また、私と一緒に授業を担当いただいた渡辺先生、松尾先生からの院生の皆さんに対する的確な助言は、私自身にとっても大変勉強になることばかりでした。

今後とも地域公共人材総合研究プログラムが一層充実、発展し、より多くの社会人院生、学部卒院生の皆さんが学び、成長されることを願ってやみません。

7年間どうもありがとうございました。

2023年3月にてご退職

白須　正　先生

（龍谷大学政策学部教授）

白須先生　細川先生
ありがとうございました

「地域公共人材総合研究特別演習」を担当して

2023年1月18日は今年度（今学期）最後の授業日であった。夜には、「地域公共人材総合研究特別演習」が開講され、いつものように受講生の研究報告に耳を傾けた。と、ありふれた授業風景であったが、2017年度後期から本演習を担当してきたわたしにとって、忘れられない日となるだろう。

今年度の受講生は政策学研究科の在学生ばかりであり、経営学研究科の院生の姿を見ることはない。2016年4月にスタートした地域産業コースは、2022年3月に最後の修了生を送り出しており、受講する院生がいないからである。すでに2021年度に募集停止しているため、この2年間（2021年度、2022年度）は政策学研究科の院生だけが受講生であった。

このように書くと「いやいや担当している」と思われる方もいるかもしれないが、決してそうではない。隔週6、7講時の二コマ連続の時間は、わたしにとっては楽しく、やりがいのあるものであった。そのことはこれまでに投稿した『グローカル通信』の記事にも記している通りである。

わたし自身の研究上の関心にもよるが、とりわけ社会人院生の研究報告は刺激的であった。職場や地域という「現場」での問題や課題を携えて、大学院に入学される。そして、わずか1年（実質的には入学後、9か月程度）で論文を仕上げなければならないという厳しい状況を目の当たりにしつつ、院生の皆さんに「伴走」させていただいた。

さて、経営学研究科は1994年4月、修士課程にビジネス・コースを設置している。昼夜開講、社会人への門戸開放は、他大学に先んじたことであった。この点で、前述の地域産業コースの廃止は、28年間続いてきた社会人の受け入れの終了を意味するものでもあった。わたし自身はそのすべての期間に関わってきたわけではないが、一抹の寂しさを覚える。

日本では高等学校を卒業後に大学に進学するのが一般的であるが、学校（大学）と職場を行き来することもまた重要であると思う。いったん働いてから大学に進学する。あるいは卒業後に就職し、その後に大学院で学び、また職場にかえっていく。そのようなことが本来は望ましいし、そのような時代がやってくることを期待したい。それは、企業中心社会である日本を変えることにもつながるだろう。

わたしのこのような思いは、地域公共人材総合研究プログラムの着実な実績でも裏付けられている。地域公共人材総合研究プログラムのますますの発展を祈念したい。

2022年度まで
地域公共人材総合研究
特別演習　ご担当

細川　孝　先生

（龍谷大学経営学部教授）

院生の声届けますー 2022 年度を振り返ってー

「『出会いの数』に感謝！」

伊藤　悠希（政策学研究科修士１年）

コロナ禍が明け、対面で始まった大学院生活ですが「あっという間」だが「濃密」な1年であったと感じています。

例年よりも学部卒業後に直接、大学院にきた学生が多いと聞いておりますが、それぞれ刺激を受けながらも、和気藹々と物事を深く考えよう!という雰囲気がありました。

研究分野がそれぞれ異なるものの、新しい知見をたくさん吸収できたのは政策学研究科ならではだと思います。また、今年、入学された社会人修士の方のみならず、去年卒業された社会人院生の方とも継続的に関わりを持つことができました。この『関わりしろ』の多さに感謝をしながら、次年度の修士論文執筆および卒業に向けて躍進できる1年間になるよう心掛けていきたいです。

「つながりを感じられた一年」

可児　卓馬（政策学研究科修士１年）

2022年はコロナ禍の行動制限が少しずつ解除され、一年を通してキャンパスで授業を受けることができました。そのお陰で背景も所属も異なる人たちと色々と意見を交わし、親交を深めることができました。特に同じゼミに所属していた友人達とはキャリア、年齢関係なく議論し、考えを深めることができました。研究だけでなく食事や合宿の機会にも恵まれ楽しい一年を過ごせました。オンライン中心で一人で論文を書かなければいけない環境だったら途中で挫折していたかもしれません。

一年を通して一番驚かされ続けたのは、政策学研究科の先生方や学生の一体感でした。とても親しみやすくパワフルなチームに関わることができ、充実した一年を送ることができました。これからも何かの形で関われることを楽しみにしています。ありがとうございました。

第３回先進的地域政策研究講演会感想

講師：六原まちづくり委員会委員長　菅谷　幸弘氏、株式会社スマートホーム代表　小林　悟氏

テーマ：東山区六原学区のまちづくりの取り組みと今後の展望

寺本　俊孝　（法学研究科修士課程1年）

先進的地域政策研究は毎回、魅力的なゲストの方にお越しいただき、地域の第一線で活躍した生きた経験のお話しを通じて実践的なリーダーシップを学べるまたとない機会でした。政策学部の魅力的なプログラムの一つであり、他では得られない知見や実践的な知識が得られました。3回目の研究は京都六原地区の先端的かつ独創的な地域創生の成功事例を学ぶことができました。成功の裏には、情熱を持った人たちの純粋な努力があることを知りました。この経験を自分の役割の中で、実社会で役立てるべく、これからも実践的な努力を続けていく所存です。

第３回地域リーダーシップ研究講演会感想

講師：西粟倉村役場　上山　隆浩氏

テーマ：“生きるを楽しむ”村づくり～西粟倉村の自然資本価値最大化の取組～

吉川　絢菜　（政策学研究科修士課程1年）

地域リーダーシップ研究最終回は、西粟倉村役場の上山さんのご講演をお聞きしました。上山さんからは、SDGs未来都市にも選定されている西粟倉村の取り組みについてご紹介していただきました。「百年の森構想」を中心とした幅広いチャレンジが人口減少の抑止という成果に繋がっているというお話からは、地域の持続性を高めるための地域ごとのチャレンジの重要性を学ぶことができました。

これまでの3回の講演会を通して、地域のリーダーの役割や、地域で求められるリーダーシップについて理解することができました。この講義で得た学びを、今後の研究にも役立てていきたいです。

早期履修生の感想

吉田　瑞希　（政策学部4年）

学部4回生の内から一足先に大学院の授業を受講させて頂ける早期履修制度ですが、本当にたくさんの学びと刺激を得ることができました。

何と言っても少人数で密に行われるコミュニケーションによってそれぞれが持つ様々な問題意識から一つのテーマを掘り下げるという体験がとても新鮮でした。議論の中で教科書の知識に留まらない現場の経験を共有してもらうことを通して、より深く学ぶことができました。授業内外での活発な議論、社会人として働きながら学ぶ姿、学んだことを実践しようとする気構えから常にエネルギーを貰って、それがまた別の学びの機会に繋がっていったように思います。学びの面でも刺激の面でも、自分の学ぶ方法や姿勢を一段引き上げることができたことは私にとってとても大きな収穫になりました。

事務局インフォメーション

●入学式
日　時：2023年4月1日（土）15：30～
場　所：国立京都国際会館

●地域公共人材総合研究プログラム　公開講演会
日　時：2023年4月29日（土・祝）13：30～　　場　所：龍谷大学深草学舎　和顔館（予定）
講　師：共和化工株式会社　中村　規代典　氏
リサイクルの先進都市であるブラジルのクリチバ市でのご経験などをお話頂きます。
ご希望の方はseisaku@ad.ryukoku.ac.jpまで

地域公共人材総合研究プログラム　ニュースレター　『グローカル通信』　通巻61号　2023年3月

発　行　/　龍谷大学大学院　地域公共人材総合研究プログラム
連絡先/　政策学部教務課
TEL:075-645-2285　FAX:075-645-2101

H　　P / https://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
編　　集 / 吉田匠、吉川絢菜
編集補助 /松尾修、鮫島広樹
監　　修 / グローカル通信編集委員会